平成２７年１０月６日（火）

老球の細道１７０

ザ・タフガイ

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

北里大学特別栄誉教授の大村智氏がノーベル医学生理学賞を受賞した。業績は寄生虫病の治療薬「イベルメクチン」開発で、それによってアフリカや南米などで流行している「河川盲目症」を制圧し多くの患者を失明から救ったことである。

大村さんは定時制の高校教師から研究者の道に進んだ異色の経歴を持つ。定時制高校教師の時代に生徒の学ぶ姿に胸を打たれ、幼少の頃からの祖母からの「人のためになることをしろ」の薫陶との化学反応が一心に勉強する努力を培ったという。そしてもう一つ忘れてならないのは、高校時代にスキー部と卓球部の主将を務め、運動に明け暮れたタフな日々が大村氏のその後の研究に明け暮れるパワーを育成したのではないだろうか。

コッホ、パスツールと並ぶ世界３大研究所と言われる大村氏が在職していた北里研究所には、かつて会津の野口英世も研究に没頭していた時期があった。野口がもう少し長く生きていたらノーベル医学生理学賞受賞の日本人第一号になっただろう。

ナポレオンが１日３時間しか眠らなかった（実際は仮眠でカバーしていた）話は有名であるが、野口も「ナポレオンにできたのだから、私も必ずできる」と宣言し、１日３時間しか眠らなかったそうである。アメリカのロックフェラー医学研究所で研究をしていた時、野口のあまりの熱心さに「日本人は二日に一度しか眠らなくて済む」と噂されたほどである。研究に没頭していたということもあり、１日３時間熟睡すれば十分体力が保てる体質だったのではないかと思われている。

野口の生活は、ほとんど研究一辺倒という生活にみられがちであるが、なかなか多趣味の人でもあったようである。人に頼まれた場合等に、俳句や短歌を詠んだり、墨跡を残したり、油絵を描いたりと器用に何でもこなしていたそうである。

「まて己（おのれ）　咲かで散りなば　何が梅」（野口英世よ　出世しなくて何が野口英世だ　俺は何が何でも成功してやる）。これは東京修行時代、順天堂医学院に助手として勤務していた際、俺は絶対にやり遂げるんだという強い気持ちを詠んだものである。この俳句にもあらわれているように野口は意志が相当強かった。医学の道を志し、上京の際に生家の柱に刻んだ「志を得ざれば再び此地お踏まず」（目標が達成できなければ決して故郷に帰らない）との決意文にも、野口の意思の強さが現れている。

ところで、話はバスケットボールに戻るが、坂下ミニバスケットボール・タフガイコーチの二瓶氏が主宰する「バスケットボール・シュート教室」が毎週月曜日の夜７時から９時まで坂下中学校で開催されている。４月からスタートして半年になるが、ここにもタフガイの小学生、中学生が集まって来る。坂下のみならず会津一円からの参加である。

自分の学校の練習が終わった後かけつけたり、昨日は試験前にもかかわらず平気で参加する中学生もいた。もちろん試験準備をしたうえでの参加であることは言うまでもない。偉大なことを成し遂げた人物は子どもの頃から皆例外なくタフだった。

「タフガイ」とはｔｏｇｈ　ｇｕｙ。疲れを知らないたくましい男という意味であるが、男女を問わず、他人の倍努力する、他人が休んでいる時行動を続ける、他人がやらないことを好んでする。この「努力の３条件」を楽しみながらやれる人とオレ流に定義している。